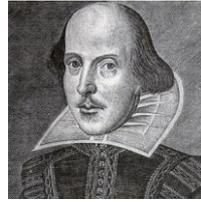




日本のシェイクスピア—坪内逍遙を超えて—

武蔵野学院大学 佐々木隆



資料

資料 1 坪内逍遙訳『該撒奇談・自由太刀餘波鋭鋒』(1884)の「附言」……………01
 資料 2 関連年表……………03
 資料 3 気になる考え方……………10
 資料 4 参考文献……………10
 資料 5 パワーポイント資料 (モノクロ) 別添

資料 1 坪内逍遙訳『該撒奇談・自由太刀餘波鋭鋒』(1884)の「附言」

附言

る 眼の園く蓋け所は見のこの用ひ原
 べの子し蓋ははののひのひて本
 くの人弟し原は文ののの院の院本
 失の院に之本意文のの爲の本と
 は院の與ののの味ののめには全
 ざ本のへ意ののの通の都つにま
 ら規のてをのののじ合がわはた
 ん矩り直失はひのののの廉かと
 をににににににににににににに
 力戻之これらんを力解し淨瑠璃
 むれるな演戯させんとみ原來此
 とを演戯させんとみ原來此國の
 いを演戯させんとみ原來此國の
 へを演戯させんとみ原來此國の
 どを演戯させんとみ原來此國の
 中を演戯させんとみ原來此國の
 には原來此國の
 彼原來此國の
 我原來此國の
 思想原來此國の
 の成原來此國の



今回の発表の資料の多くは早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の所蔵のものを利用した。なお、同博物館は来年開館90周年の記念展示を行うため現在利用が一部制限されている。佐々木は早稲田大学坪内博士記念演劇博物館招聘研究員(2012年より現在に至る)として活動中。

財団法人逍遙協会編『逍遙選集』(別冊第2)(第一書房、1978年2月)、p.301

資料2 関連年表

- 1564 ウィリアム・シェイクスピア生
- 1564 ウィリアム・アダムズ生
- 1600 関ヶ原の戦い
- 1600 イギリス人航海士・水先案内人、ウィリアム・アダムズ乗船のリーフデ号、豊後に漂着
- 1613 クローブ号、平戸に入港。司令官ジョン・セーリス、ウィリアム・アダムズを伴い江戸に赴き、徳川家康と徳川秀忠に謁見し、ジェームズ一世の親書を渡す
- 1616 シェイクスピア没
- 1639 オランダと中国を除く外国との交流・貿易の制限（鎖国）
- 1695 近松門左衛門『釈迦如来誕生会』（初演）
- 1703 近松門左衛門『曾根崎心中』（初演）
- 1771 近松半二『妹背山婦女庭訓』（初演）
- 1808 **フェートン号事件**
- 1809 幕府、蘭学通詞に英語学習を命じる
- 1810 四世鶴屋南北・二世桜田治助『心謎解色糸』（初演）
- 1810 吉雄権之助『諸厄利亜言語和解』第1冊（焼失）
- 1811 岩瀬弥一郎『諸厄利亜言語和解』第2冊、第3冊（焼失）
- 1811 本木正栄『諸厄利亜興学小筈』
- 1814 本木正栄『諸厄利亜語林大成』 *日本で最初の英和辞典
- 1839 **林則徐『四洲志』 *「沙士比阿」として紹介される（日本に輸入されず）**
- 1840 阿片戦争（～1842）
- 1840 **リンドレイ・マリ／澁川六蔵訳『英文鑑』（～1841）**
*日本で最初の英文法書。「シャーケスピール」として紹介される（～1841）
- 1841 陳逢衡『英吉利紀略』（中国） *「沙士比阿」として紹介される
- 1842 魏源『海国図志』（50巻本）完成（中国） *「沙士比阿」として紹介される
- 1844 魏源『海国図志』（50巻本）刊行（中国） *「沙士比阿」として紹介される
- 1847 魏源『海国図志』（60巻本）刊行（中国） *「沙士比阿」として紹介される
- 1848 ラナルド・マクドナルド、利尻島に上陸
- 1851 ジョン万次郎（中浜万次郎）、帰国
- 1852 魏源『海国図志』（100巻本）刊行（中国） *「沙士比阿」として紹介される
- 1853 陳逢衡／荒木審訓読『英吉利紀略』（翻刻） *「沙士比阿」として紹介される
- 1853 Thomas Milner. *The History of England.*
- 1853 ペリー来航
- 1854 日米和親条約
- 1856 **ミュアヘッド漢訳『大英国志』（中国） *「舌克斯畢」として紹介される**
- 1856 洋学所を蕃所調所と改める
- 1858 英語伝習所を開設
- 1858 日米修好通商条約
- 1859 中浜万次郎『英米対話捷徑』
- 1859 **坪内逍遙生**
- 1860 蕃所調所で英学が正科となる
- 1861 **慕維廉（ウィリアム・ミュアヘッド）『英国志』（翻刻） *「舌克斯畢」として紹介される**
- 1862 蕃書調所を洋学調所と改める
- 1862 堀達乃助『英和对訳袖珍辞書』
- 1863 洋学調所を開成所と改める



1863 『英吉利文典』 開成所

1864 シェイクスピア生誕300年

1866 J.C.Hepburn/岸田吟香共編『和英語林集成』 *日本で最初の和英辞典

1866 ベンジャミン・シアー、2月19日に生糸検査場(72番、横浜)で「シェイクスピアの朗読」として『ハムレット』と『夏の夜の夢』を取り上げる。

*日本で最初のシェイクスピア・パフォーマンス
(升本匡彦『横浜ゲーテ座』1986、第2版)

1868 明治維新

1874 *The Japan Punch* 掲載のハムレット

1883 河島敬蔵訳『欧州戯曲ジュリアス、シーザルの劇』
(『日本立憲政新聞』2月27日~4月11日連載)

1884 坪内逍遙訳『該撒奇談・自由太刀餘波鋭鋒』 東洋館

1885 宇田川文海翻案・勝彦蔵脚色・中村宗十郎一座『何桜彼桜銭世中』 大阪戎座
*日本人による初めてのシェイクスピア劇上演

- 宇田川文海のシェイクスピア (以下は新聞連載年)
- 「何桜彼桜銭世中」(『ヴェニスの商人』の翻案) (1885)
- 「四つの緒」(『お気に召すままに』の翻案) (1888)
- 「悪因縁」(『ロミオとジュリエット』の翻案) (1889)
- 「阪東武者」(『オセロ』の翻案) (1892)
- 「船戦」(『マクベス』の翻案) (1894)
- 「悪縁」(『ロミオとジュリエット』の翻案) (1897)

1885 坪内逍遙『小説神髓』(~1886、全9冊) (松月堂)

1886 演劇改良会設立

1886 外山正一『演劇改良論私考』 丸善商社書店

1886 末松謙澄『演劇改良意見』 文学社

1886 改進黨人編『劇場改良法』 (大阪出版会)

1887 天覧劇『勸魚帳』 他

1889 坪内逍遙 短編小説『細君』発表、以後、小説の発表はしていない。

1890 坪内逍遙、近松研究を始める

1890 東京専門学校に文学科が新設される

1890 坪内逍遙・朗読研究会結成

1891 坪内逍遙「読法を興さんとする趣意」(『国民之友』第115号~第116号)

1891 坪内逍遙「講義ノート 比照文学」(~1892)

1892 松林伯円口演・講談『痘痕伝七郎』(『オセロ』)
*平辰彦の研究による。

1894 坪内逍遙「功過録としてのシェイクスピア」(東京専門学校文学科茶話会の講話)

1896 坪内逍遙「文学としての我が在来の脚本」(『太陽』第2巻第2号)

1896 坪内逍遙「舊劇狂言作者及び舊脚本」(『太陽』第2巻第5号)

1896 近松研究会(『早稲田文学』第18号)に「近松研究会第一会」の記事あり

1901 坪内逍遙訳/畠山古瓶脚色『該撒奇談』(伊井蓉峰一座: 明治座)

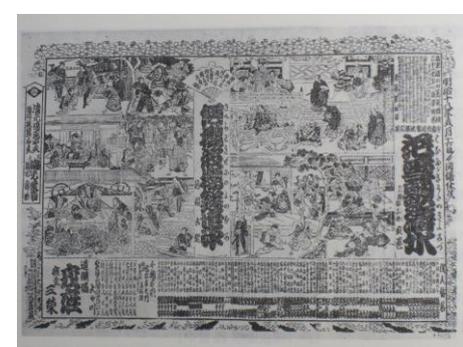
1902 高安月郊翻案『闇と光』(『リヤ王』) (福井茂兵衛一座: 京都南座)

1902 『紅葉御殿』(『ハムレット』の翻案) (秋月桂太郎・山田九州男: 大阪朝日座)
*日本人による初めての『ハムレット』劇上演?

1903 江見水蔭翻案『オセロ』(川上音二郎一座: 明治座)

1904 古澤姑射・浅野馮虚『沙翁全集』 日本図書 (~1907) 全10巻

1905 易風会



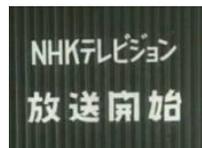
- 1906 文芸協会設立 (1913 解散)
- 1907 坪内逍遙「演劇界の未来」(初出未詳)
- 1907 荒川重秀・沢村宗之助『ジュリアス・シーザー』(洋劇研究会：神田三崎町東京座)
*最初の日本人による原語上演
- 1909 坪内逍遙訳『沙翁傑作集』⇒『沙翁全集』早稲田大学出版部 (～1928)
*『沙翁全集』は1909年に『沙翁傑作集』としてまず出版された。『沙翁全集』はもともと『沙翁傑作集』として『ハムレット』から『シムベリン』の20巻の予定であったらしいが、早稲田大学出版部が全集を希望し、坪内逍遙も残り19編の翻訳に取りかかったといういきさつがあった。
- 1909 坪内逍遙、近松展覧会での講演「近松対シェークスピア対イブセン」
- 1909 坪内逍遙「近松対シェークスピア対イブセン」(『読売新聞』10月)
- 1910 坪内逍遙「近松とシェークスピア」(水谷不倒校訂注釈『近松傑作全集』第一巻、早稲田大学出版部)
- 1910 坪内逍遙「日本に沙翁劇を興さんとする理由」(文藝協会研究所第一期生試演のシェークスピア劇の解説として)
- 1910 坪内逍遙「翻案劇」(『劇と詩』第3号)
- 1911 坪内逍遙「演劇刷新の依然としての困難なる所以」(『読売新聞』2月26日、28日)
- 1911 坪内逍遙訳・演出『ハムレット』(全5幕12番、5月20日～26日、帝国劇場)
- 1911 坪内逍遙「近松対シェークスピア対イブセン」「近松とシェークスピア」(『劇と文学』富山房)
- 1912 近代劇協会結成
- 1913 志賀直哉『クローディアスの日記』(洛陽堂)
- 1913 宝塚唱歌隊結成 (現在の宝塚歌劇団の前身)
- 1914 宝塚少女歌劇第1回公演『ドンブラコ』『浮れ達磨』『胡蝶』
- 1914 佐藤紅縁原作『新ハムレット』(日本人製作の舞台の映像化・シェイクスピア映画)
- 1915 木村鷹太郎『沙翁ハムレットの東洋的材料』名著評論社
- 1915 坪内逍遙「活動写真と我劇の過去と将来」(『舞台芸術』第2号)
- 1916 坪内逍遙「老近松を世界に紹介すべし」(『新演藝』)
- 1916 坪内逍遙「何故に日本人が沙翁を記念するか?」(『新演藝』)
- 1916 シェイクスピア没後 300年**
- 1919 田中栄三監督『オセロ』(日本人製作の舞台の映像化・シェイクスピア映画)
- 1919 『足利合戦』(日本人製作のシェイクスピア映画・詳細不明)
- 1920 坪内逍遙「脚本の朗読法」(『演芸画報』)
- 1921 劇術会によるシェイクスピア劇上演
『ベニスの商人』(1921)、『ハムレット』(1921)
『ベニスの商人』(1922)、『マクベス』(1922)
『ベニスの商人』(1923)、『ハムレット』(1923)
『マクベス』(1923)
『ハムレット』(1924)
- 1924 築地小劇場結成・開場
- 1927 加藤長治主宰、地球座結成
- 1928 坪内逍遙訳『沙翁全集』早稲田大学出版部 完成
- 1928 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館開館
- 1929 坪内逍遙「脚本朗読術の研究の必要」(『週刊朝日』6月16日)
- 1930 日本シェイクスピア協会設立 (第1次)
- 1930 日本俳優学校
- 1932 山口武美・市河三喜編「日本シェイクスピア書誌」(～1932)
- 1933 竹村覚『日本英学発達史』岩波書店



- 1933 坪内逍遙「国訳沙翁劇の上演は可能か、不可能か？」(『藝術殿』)
- 1933 山口武美『日本沙翁書目集覧』詩仙洞
- 1933 坪内逍遙『シェークスピア研究葉』早稲田大学出版部
- 1934 中央公論出版部編／坪内逍遙校閲『シェークスピア入門』中央公論社
- 1935 日本女子大学による原語シェイクスピア劇上演開始(～1981)
- 1937 文学座結成
- 1940 Toyoda Minoru. *Shakespeare in Japan*. The Iwanami Shoten
- 1941 グンドルフ／竹内敏雄訳『シェイクスピアと独逸精神』(上下)(岩波文庫)岩波書店
*Gundolf, Friedrich. *Shakespeare und der Deutsch Geist*の翻訳。
- 1941 豊田実『日本英学史の研究』岩波書店
- 1942 Blyth, R. H. *Zen In English Literature and Oriental Classics*. The Hokuseido Press.
*邦題は『禅と英文学』。
- 1943 グンドルフ／小口優、浅井真男訳『シェイクスピア・その本質と作品』筑摩書房
*Gundolf, Friedrich. *Shakespeare—Sein Wesen und Werk*の翻訳。
- 1944 俳優座結成
- 1945 太平洋戦争終結
- 1946 坪内逍遙訳／土方与志演出『真夏の夜の夢』(6月6日)帝国劇場
*戦後初のシェイクスピア劇上演
- 1947 森芳介脚本・訳／宮田輝明・木下徹演出『ハムレット』(11月13日～30日)帝国劇場
*戦後初の『ハムレット』上演(戦後の占領軍総司令部による古典演劇の弾圧の終了)
- 1948 関東学院大学シェイクスピア劇英語劇開始(1948～1950 関東学院女子専門学校、関東学院女子短期大学)(原語上演)
- 1949 日本演劇学会設立
- 1950 荒井良平監督『エノケンの豪傑一代男』(シェイクスピア翻案映画)
*これまでのシェイクスピア映画研究では取り上げられていない。
- 1950 近代劇場結成(近代座に改称、1966)
『十二夜』(1950)、『テムペスト』(1950)
『間違ひつづき』(1951)、『ちゃちゃ馬馴らし』(1951)、『真夏の夜の夢』(1951)
『ベニスの商人』(1952)、『むだ騒ぎ』(1952)
『ちゃちゃ馬馴らし』(1953)、『マクベス』(1953)、
『十二夜』(1954)、『真夏の夜の夢』(1954)、『間違ひつづき』(1954)、『ちゃちゃ馬馴らし』(1954)
『テムペスト』(1955)、『ベニスの商人』(1955)、『冬の夜ばなし』(1955)、『むだ騒ぎ』(1955)
『リヤ王』(1955)
『真夏の夜の夢』(1956)
『ベニスの商人』(1957)
『ちゃちゃ馬馴らし』(1958)、『冬の夜ばなし』(1958)
『リヤ王』(1961)、『真夏の夜の夢』(1961)
『ちゃちゃ馬馴らし』(1965)
『ちゃちゃ馬馴らし』(1966)
- 1951 サンフランシスコ平和条約
- 1951 ユネスコ加盟
- 1951 日本演劇協会設立
- 1951 日本演劇学会編『シェイクスピア研究』中央公論社
- 1951 同志社女子大学シェイクスピア・プロダクション(原語上演開始)
- 1951 麗澤大学英語劇グループシェイクスピア劇原語上演開始

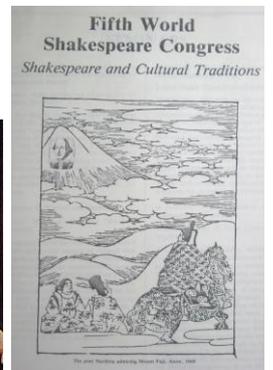


- 1952 片山博通・新作狂言『二人女房』初演 (『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案)
*菊地善太の研究による新しい発見
- 1952 三宅藤九郎・新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』執筆
- 1952 手塚治虫「鉄腕アトム」(月刊誌『少年』連載開始)
- 1953 TV放送開始
- 1953 劇団四季結成
- 1954 俳優座劇場開場
- 1954 東京演劇アンサンブル結成
- 1954 青年座結成
- 1956 国際連合加盟
- 1956 テアトル・エコー結成
- 1956 文楽『ハムレット』道頓堀文楽座
- 1956 学習院大学シェイクスピア劇研究会 (原語上演開始)
- 1957 黒澤明監督『蜘蛛巣城』(『マクベス』の翻案)
- 1957 福田恆存『明智光秀』(文学座・東横ホール)
- 1960 黒澤明監督『悪い奴ほどよく眠る』(『ハムレット』の翻案)
- 1960 加藤泰監督『炎の城』(『ハムレット』の翻案)
- 1960 カラーテレビ放送開始
- 1961 日本シェイクスピア協会設立 (第2次)
- 1963 日生劇場開場
- 1963 第1回実用英語検定開始
- 1963 パブリック・リーディング研究会結成
- 1964 東京オリンピック
- 1964 シェイクスピア生誕400年**
- 1964 河竹繁俊『日本演劇文化史話』新樹社
- 1964 日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア案内』研究社
- 1964 ケンダルー一座来日公演
- 1964 紀伊國屋ホール開場
- 1966 国立劇場開場
- 1966 ビートルズ来日
- 1966 甲南女子大学シェイクスピア劇上演開始 (原語上演)
- 1967 河竹登志夫『比較演劇学』南窓社
『続比較演劇学』(1974)
『続々比較演劇学』(2005)
- 1968 ロンドン・シェイクスピア・グループ来日公演
- 1970 大阪万博
- 1970 **ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー来日公演**
- 1971 ジャン・ジャン、演劇公演開始
- 1971 五十田安希ひとり芝居開始
*五十田安希はシェイクスピア作品から独自の発案によるひとり芝居『マクベス夫人』を生み出し、1971年に上演を開始した日本のひとり芝居の先駆者



- 1972 札幌冬季オリンピック
- 1972 荒井良雄『シェイクスピア劇上演論』新樹論
- 1973 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー来日公演 (ピーター・ブルック演出『夏の夜の夢』)
- 1973 西武劇場開場 (1986年にPARCO劇場に改名)

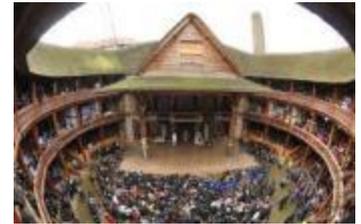
- 1974 マンヴェル／荒井良雄訳『シェイクスピアと映画』白水社
- 1975 小田島雄志訳・出口典雄演出のシェイクスピア・シアター全作品上演開始（～1981）
- 1976 三宅藤九郎・新作狂言『ぢゃぢゃ馬馴らし』初演
- 1976 SCOT 結成
- 1976 劇団昴結成
- 1978 サンシャイン劇場開場
- 1980 小田島雄志訳『シェイクスピア全集』（白水社）完成
- 1980 NHKシェイクスピア劇場（BBCシェイクスピアの全作放映開始（～1987）
- 1980 板橋演劇センター結成
- 1981 宗片邦義主宰・能シェイクスピア研究会結成
- 1981 倉橋健編『シェイクスピア辞典』東京堂
- 1982 本多劇場開場
- 1983 東京ディズニーランド開園
- 1983 三好弘『シェイクスピアと日本人のころ』公論社
- 1985 黒澤明監督『乱』（『リア王』の翻案）
- 1985 青山劇場開場
- 1987 銀座セゾン劇場開場
- 1987 蛭川幸雄演出『NINAGAWA テンペスト』
- 1987 リンゼイ・ケンブ・カンパニー来日公演
- 1987 荒井良雄による朗読シェイクスピア全集（～1992）
- 1988 東京グローブ座開場（現在、運営はジャニーズ事務所傘下の株式会社東京・新・グローブ座が行っている）
- 1989 東西ベルリンの壁崩壊
- 1989 シアター・コクーン開場
- 1989 シアターサンモール開場
- 1989 安西徹雄編『日本のシェイクスピア 100年』荒竹出版
- 1990 東京芸術劇場開場
- 1990 東京シェイクスピア・カンパニー結成
- 1990 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』エルピス
- 1990 ルネサンス・シアター・カンパニー来日公演
- 1990 和泉元秀脚色・荒井良雄演出『じゃじゃ馬馴らし』（和泉宗家）
- 1990 河竹登志夫「最終講義 比較演劇学の原点」
- 1991 第5回国際シェイクスピア学会東京大会
*統一テーマ「シェイクスピアと文化的諸伝統」
- 1991 高橋康也脚本・野村万作演出・主演『法螺侍』初演
- 1992 山田庄一演出『天変斯止嵐后晴』初演
- 1992 蛭川幸雄、ロンドン・グローブ座芸術監督就任
- 1992 商業用のインターネットサービス開始
- 1992 東北シェイクスピア・カンパニー結成
- 1992 滝静寿編『シェイクスピアと狂言』新樹社
- 1993 高橋康也、大英帝国勲章（CBE=三等勲章）
- 1993 松岡和子『すべての季節のシェイクスピア』新潮社
- 1993 荒井良雄『朗読シェイクスピア全集の世界』新樹社
- 1994 Kishi, Tetsuo, Pringle, Roger, and Stanley, Wells, editors.
Shakespeare and Cultural Traditions. Associated University Presses.
- 1994 高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』新書館
- 1995 佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧2』エルピス



- 1996 平辰彦『Shakespeare 劇における幽霊』博士論文
 1996 松岡和子訳シェイクスピア全集開始
 1996 荒井良雄『英米文学映画化作品論』新樹社
 1996 Fujita, Minoru and Pronko, Leonard, editors. *Shakespeare East and West*. Japan Library.
 1996 国立国会図書館ホームページを公開

1997 ロンドン・グローブ座開場

- 1997 新国立劇場開場
 1997 坪内逍遙訳／高瀬精一郎演出『ベニスの商人』（前進座：国立劇場大劇場）
 1998 松岡和子訳・蜷川幸雄演出による彩の国シェイクスピアシリーズ開始
 1998 Sasayama, Takashi, Mulryen, J. R., and Shewring, Margaret, editors.

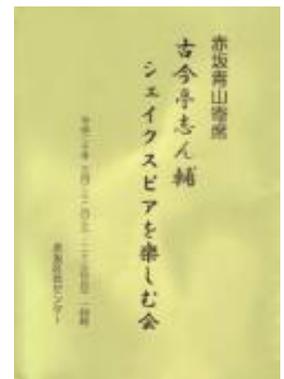
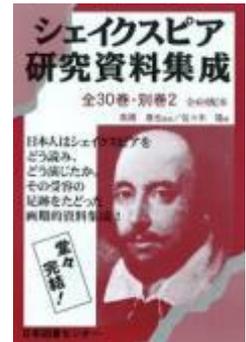


Shakespeare and the Japanese Stage. Cambridge University Press.

- 1998 高橋康也監修／佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』（別巻1）（別巻2）
 日本図書センター
 1999 日本シェイクスピア協会ホームページ正式公開

- 1999 Anzai, Tetsuo, Iwasaki, Soji, Klein, Holger, and Milward, Peter, editors.
Shakespeare in Japan. The Edwin Mellen Press.

- 1999 古今亭志ん輔・シェイクスピアを楽しむ会（落語）
 『紅屋の商い』（『ベニスの商人』の翻案）
 『小言幸兵衛の夢想』（『ロミオとジュリエット』の翻案）
 『花のお江戸の半次郎』（『ウィンザーの陽気な女房たち』翻案）
 『稲荷町の陽炎』（『夏の夜の夢』の翻案）
 『丁稚』（『オセロー』の翻案）
 『黒白粉』（『ハムレット』の翻案）
 『針千本』（『リチャード三世』の翻案）
 『冥利のゆくえ』（『ジュリアス・シーザー』の翻案）
 『寿大尽』（『リア王』の翻案）
 『小豆の仇討』（『マクベス』の翻案）
 『恋は異なるもの味なもの』（『十二夜』の翻案）
 『お伊勢参り』（『終わりよければすべてよし』の翻案）



- 2000 国際融合文化学会
 2000 瀬沼達也座長 The Yokohama Shakespeare Group 結成
 2000 楠美津香のひとりシェイクスピア開始
 2000 高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』研究社
 2001 Minami, Ryuta, Carruthers, Ian, and Gillies, John, editors. *Performing Shakespeare in Japan*.
 Cambridge University Press.

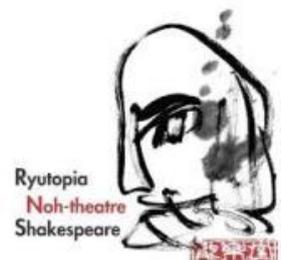
- 2001 佐々木隆『書誌から見た日本シェイクスピア受容研究』博士論文

2002 蜷川幸雄、大英帝国勲章（CBE=三等勲章）

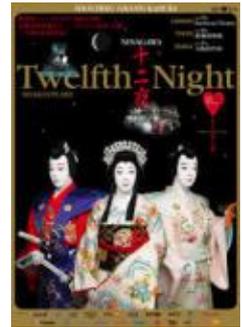
- 2002 高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』（CD-ROM）研究社
 2002 荒井良雄他編集主幹『シェイクスピア大事典』日本図書センター
 2002 上田邦義『Noh Adaptation of Shakespeare: Encounter and Union』博士論文
 2003 『シェイクスピア大全』（CD-ROM）新潮社
 2003 瀬沼達彦 YSG 座長一人十人十色朗読劇開始



- 2004 栗田芳宏構成・演出のりゅーとぴあ能楽堂シェイクスピアシリーズ開始
 2004 Schwerin-High, Friederik von. *Shakespeare, Reception and Translation: Germany and Japan*. Continuum
 2005 Kishi, Tesuo and Bradshaw, Graham. *Shakespeare in Japan*. Continuum



- 2005 佐々木隆『日本シェイクスピア総覧 天保11年—平成14年』(CD-ROM)エルピス
- 2005 泉紀子脚本・詞章/辰巳満次郎演出・振付『新作能マクベス』に始まる能シェイクスピアシリーズ
- 2005 蜷川幸雄演出『NINAGAWA 十二夜』
- 2006 レスリー・ゲントン=ダウナー、アラン・ライディングア
／水谷八也・水谷利美訳『シェイクスピア・ヴィジュアル事典』新樹社
- 2006 川田基生『シェイクスピア能研究』博士論文
- 2006 Momose, Izumi. *Japanese Studies in Shakespeare*. Edwin Mellen Press
- 2006 Fujita, Minoru and Shapiro, Michael, editors. *Transvestism and the Onnagata Traditions in Shakespeare and Kabuki*. Global Oriental
- 2007年 江戸馨・朗読会夜会特別シリーズ朗読開始



- 2007 日本シェイクスピア協会編『新編シェイクスピア案内』研究社
- 2008 関根勝『狂言とコンメディア・デッラルテ：東西文化融合のダイナミズム』能楽書林
- 2008 Theatre Project Si シェイクスピア公演(狂言)開始

- 『ハムレット』(2008)
『リア王』(2008)
『オセロ』(2009)
『フォルスタッフ』(2009)
『ロミオとジュリエット』(2010)
『マクベス』(2010)



- 2009 荒井良雄『シェイクスピア劇の翻訳と演出』英光社
- 2009 近藤弘幸『シェイクスピア受容史再考—翻訳・ナショナリズム・ジェンダー』科学研究費補助金研究報告書
(研究課題番号 1820065) *宇田川文海の研究

- 2010 小林かおり編『日本のシェイクスピア上演研究の現在』風媒社
- 2010 河合祥一郎・小林章夫編『シェイクスピア・ハンドブック』三省堂
- 2010 荒井良雄企画、日英シェイクスピア・フェルティヴァル開始
- 2010 菊池あずさ『蜷川幸雄の演出理論とその変遷』博士論文
- 2010 サトウ・サラ(佐藤智代)主宰、S's PLAYERSの朗読シェイクスピア



Reading Shakespeare 開始

- 2011 荒井良雄『戦後日本のシェイクスピア』英光社
- 2011 荒井良雄編『やさしいシェイクスピア』英光社
- 2012 遠藤栄蔵によるソネット全作朗読
- 2013 河合祥一郎『あらすじで読むシェイクスピア全作品』祥伝社

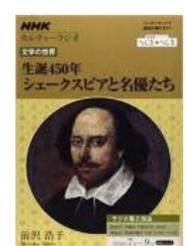
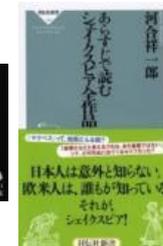


- 2014 宝塚歌劇団、公演開始100周年
- 2014 前沢浩子『生誕450年 シェイクスピアと名優たち』NHK出版
- 2014 河合祥一郎脚本・鶴澤清治作曲『不破留寿之大夫』

2014 シェイクスピア生誕450年

2015 坪内逍遙没後80年

2016 シェイクスピア没後400年



- 2016 板橋演劇センター、シェイクスピア作品37作品上演達成
- 2016 ボブ・ディランのノーベル賞受賞スピーチ(2016年12月11日)
*シェイクスピアへ言及

- 2017 小林政広監督『海辺のリア』
- 2017 和泉元彌作・演出 新作シェイクスピア狂言『テンペスト』

2018 坪内逍遙訳『沙翁全集』出版90周年

2018 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館開館90周年

- 2020 東京オリンピック・パラリンピック

資料3 気になる考え方（下線発表者）

1 坪内逍遙『小説神髓』（全9冊、松月堂、1885～1886）（逍遙協会編『逍遙選集』別冊第3、第一書房、1977）、p.38.

およそ小説の範囲は、演劇の範囲よりも広く、時世々々の情態をば細大となく寫しだして、ほとんど遺憾を感じざらしむ。譬へば演劇にては、人の性情を寫しだすに、もっぱら観者の耳に訴へ、また其眼に訴ふるがゆゑに、其場かへりて狭けれども、小説にては之に反して、たゞちに讀者の心に訴へ、その想像を促すゆゑ、其場頗る廣しといふべし。

2 改進黨人編『劇場改良法』（大阪出版会、1886）、p.2

・演劇改良会及び創立をきいて卑見を述べ

それ演劇を改良せんとすれば仕事ハ一にして足らざるべし劇場全体の改良ハ更なり舞臺の構造土間棧敷の模様道具の具合唯方の鹽梅并に俳優の身持の如きも十分改良をば要すべしと思へど其中第一に緊要なるは所謂正本改良なるべし即ち演劇の脚色の改良これぞ改良の本尊本元

3 坪内逍遙「讀法を興さんとする趣意」（1891）（『逍遙選集』第11巻、第一書房、1977）、pp.254-266 抜粋

- ・讀法を大別して三種とす。機械的讀法と文法的讀法と論理的讀法と是なり。
- ・機械的讀法とは、俗にいふ素讀なり。文章の句讀をだに殊更には注意せずして、只文字の並びつながれる順序を追ひて、...。所詮、讀に情無く、生活無し。此の法或ひは名づけて死讀法ともいふべくや。
- ・文法的讀法は、所謂朗讀法の本領にて、又の名を正讀法ともいふべし。發音は法に合ひ、句讀は宜しきを得、讀み聲の緩急抑揚が善く文意と調和して正當なるが故なり。即ち文章を朗讀して、他人の聴覺に訴へ、彼れの視覺に訴へたらんと同様の感銘を生じしめんと力むるものなり。
- ・論理的讀法。...、人性研究法の一端とし、延いて人間研究法の第一段階とせんことを欲する者なり。

4 坪内逍遙「演劇界の未来」（1907）（逍遙協会編『逍遙選集』第10巻、第一書房、1977）、p.521

「劇界の將來を支配すべきものは、新脚本である」と私は常にいつて居る。舊劇にせよ、新劇にせよ、向後の發展は一に新脚本の如何に依つて定まるであらう。

5 坪内逍遙「日本に沙翁劇を興さんとする理由」（1910）（逍遙協会編『逍遙選集』第12巻、第一書房、1977）、pp.635-644 より抜粋

第一は今の劇壇の沈滞を救ふ一方便ともならうと思ふ。第二に沙翁は世界的の詩人であるから、之を日本に移し植ゑることは決して不可能でないのである。第三に沙翁劇を日本人の心で別途に解釈を試みるといふことは、世界文芸上の一つの貢獻であると思ふ。第四に（これは少々早計的な臆測ではあるが）自分が此志を起したのは、今の外國の沙翁劇が（嘗て想像し豫期した程には）かたじけないもので無いらしいと感じ始めたからでもある。」

6 坪内逍遙「演劇刷新の依然として困難なる所以」（1911）（逍遙協会編『逍遙選集』第10巻、第一書房、1977）

第一の原因は實演に適した兼ねて時代に適切な良脚本が無いといふこと。（p.482）

一、脚本をも俳優をも根本的に改むること。即ち在來の脚本と俳優とを絶対に排斥すること。（p.483）

7 坪内逍遙「脚本朗讀術研究の必要」（1929）（逍遙協会編『逍遙選集』別冊5、第一書房、1978）、p.523/p.523/pp.523-524.

およそ他人に聴かせる為に讀む場合には、読書の法に三段の階級ある。最低級が機械的讀法であり、其次が文法的讀法であり、最上級が論理的もしくは心理的讀法とでも名づくべきものである。

.....
一言でいふと、危機に立つわが舊國劇を救済して、常來の新しい國劇を興さうとするに當つての準備は一に脚本朗讀術の完成にあるとさへいへる。

.....
本來演劇といふものは、内外ともに、セリフを性命とするものである。劇中に現れる各種人物の性格、其思想、感情の

微妙な變化に相應するやうに、其セリフの一々を言ひ廻はし得ると然らざるとに其劇の死活は繋つてゐるのである。セリフを撥無した默劇といふものもあれば、同じくセリフを度外視する舞踊劇といふものもある。殊に、近年は、種々雑多の新劇が競ひ起つて、劇其物よりも寧ろ舞臺装置の新様式を、照明を、鳴り物を、扮装を、其他の附帶的意匠を主眼とするやうな劇が相接踵して現れてはゐるが、それは所謂流行で、とどの詰りは矢ツ張りセリフ本位の劇へ廻歸せないわけにはいくまいと少なくとも私は堅く信じてゐる。新様式の舞臺装置の、照明だの、扮装の新意匠だのは、要するに、刺身のツマである。

8 坪内逍遙『国訳沙翁劇の上演は可能か、不可能か?』(1933) (逍遙協會編『逍遙選集』別冊5、第一書房、1978)、p.319.

われわれはわれわれの立場から、われわれの解釈、われわれの趣味に依つて、われわれみづからの為の演出を試みるがよい。日本人の立場から。これは(文芸協會当時からの)私自身のモットーである。

9 三好弘『シェイクスピアと日本人のころ』(公論社、1983)、p.3.

シェイクスピアを読んで考えると、日本人のころで新しい意味を見出すことである。

10 高橋康也 The Opening Speech (第5回国際シェイクスピア学会東京大会、1991) (日本シェイクスピア協會編『日本シェイクスピア協會三十年史』日本シェイクスピア協會、1993)、p.12.

It was not until the mid-nineteenth century that this country again started participating in a process of international cultural exchange. And one of the first cultural items to be imported and reproduced was Shakespeare.

It took another century since then before Japan came to export not only cameras and motor-cars but also cultural products like Kurosawa's *The Throne of Blood* and *Ran*. These films demonstrated to the global film-viewers some unexpected possibilities of responding to Shakespeare.

11 荒井良雄『戦後日本のシェイクスピア』(英光社、2011)、pp.vii-viii.

二種の翻訳シェイクスピア全集を持ち、三つ目の完結が近づいている翻訳大国の日本には、全国津々浦々に大小さまざまな演劇空間が出来ていて、上演や朗読などを、美術や音楽や映画と同様、市民のだれもが楽しめる文化環境が現出している。日本は演劇大国にもなっているのだ。

12 ボブ・ディランのノーベル賞受賞スピーチ (2016年12月11日) 抜粋

I began to think about William Shakespeare, the great literary figure. I would reckon he thought of himself as a dramatist. The thought that he was writing literature couldn't have entered his head. His words were written for the stage. Meant to be spoken not read. When he was writing Hamlet, I'm sure he was thinking about a lot of different things: "Who're the right actors for these roles?" "How should this be staged?" "Do I really want to set this in Denmark?" His creative vision and ambitions were no doubt at the forefront of his mind, but there were also more mundane matters to consider and deal with. "Is the financing in place?" "Are there enough good seats for my patrons?" "Where am I going to get a human skull?" I would bet that the farthest thing from Shakespeare's mind was the question "Is this literature?"

(<http://www.nikkei.com/article/DGXMZO10538020R11C16A2I00000/>) (2017年1月4日アクセス)

その時私の頭に浮かんだのは、偉大なる文学の巨匠ウィリアム・シェイクスピアでした。彼は自分自身のことを劇作家だと考え、「自分は文学作品を書いている」という意識はなかったはずで、彼の言葉は舞台上で表現するためのものでした。つまり読みものではなく語られるものです。彼がハムレットを執筆中は、「ふさわしい配役は？ 舞台演出は？ デンマークが舞台でよいのだろうか？」などさまざまな考えが頭に浮かんだと思います。もちろん、彼にはクリエイティヴなヴィジョンと大いなる志がまず念頭にあったのは間違いないでしょうが、同時に「資金は足りているか？ スポンサーのためのよい席は用意できているか？ (舞台で使う) 人間の頭蓋骨はどこで手配しようか？」といったもっと現実的な問題も抱えていたと思います。それでも「自分のやっていることは文学か否か」という自問はシェイクスピアの中

には微塵もなかったと言えるでしょう。

(<http://rollingstonejapan.com/articles/detail/27267/2/1/1>) (2017年1月4日アクセス)

資料4 参考文献

倉橋健編『シェイクスピア辞典』(東京堂出版、1972年8月)

財団法人逍遙協会編『逍遙選集』(全12巻、別冊5巻、第一書房、1977年～1978年)

大島芳材「坪内逍遙とシェイクスピア」(『立正大学人文科学研究年報』別冊)(第4号)

高橋康也編『シェイクスピア・ハンドブック』(新書館、1994年12月)

高橋康也監修/佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』(全30巻+別巻2)(日本図書センター、1997年～1998年)

出口典雄監修『一冊でわかるシェイクスピア作品ガイド37』(成美堂出版、2000年9月)

高橋康也・大場建治・喜志哲雄・村上淑郎編『研究社シェイクスピア辞典』(研究社、2000年11月)

荒井良雄・大場建治・川崎淳之助編『シェイクスピア大事典』(日本図書センター、2002年10月)

平辰彦「明治20年代における坪内逍遙のシェイクスピア観と日本近代小説—読む<ノベル>と語る<ドラマ>の関係—」(『秋田経済法科大学経済学部紀要』第323号、2000年9月)

川戸道昭『明治のシェイクスピア』(大空社/ナダ出版センター、2004年5月)

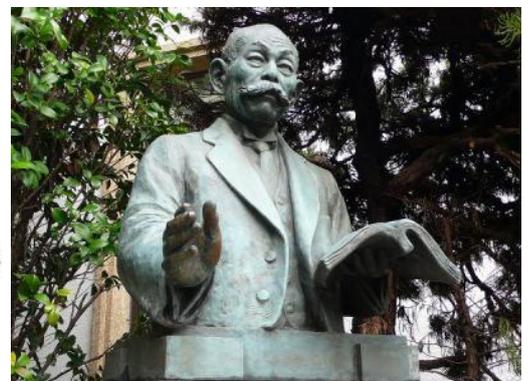
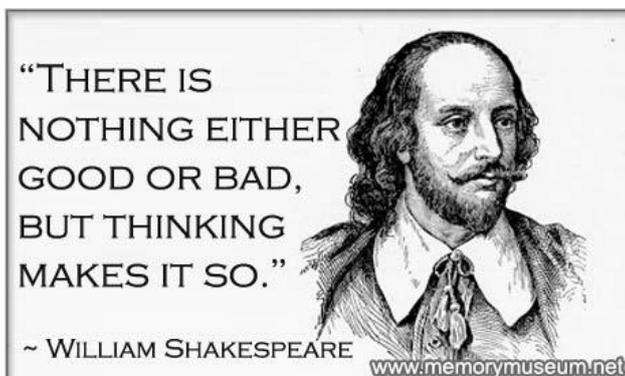
河合祥一郎・小林章夫編『シェイクスピア・ハンドブック』(三省堂、2010年7月)

佐々木隆「書誌から見た『近松門左衛門とシェイクスピア』比較研究」(『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第4輯、武蔵野学院大学、2011年4月)

佐々木隆「朗読シェイクスピア」(『むらおさ』第22号、むらおさ同人会、2015年7月)

佐々木隆『近松会雑誌』とシェイクスピア」(『むらおさ』第23号、むらおさ同人会、2016年1月)

佐々木隆『日本の沙翁劇と英国のシェイクスピア劇 受容を通して見る日本文化』(武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年7月)



作成 武蔵野学院大学 佐々木 隆 「佐々木隆研究室ホームページ」
http://www.ssk.econfn.com 発行日 2017年9月8日

